



東京スカイツリー®と鉄形蕙斎筆『江戸一目図屏風』

■東京スカイツリー
東京スカイツリーは、世界一高い電波塔として、二〇一二年二月に竣工しました。墨田区民の皆さんとしては、この東京の新名所の誕生に、大きな力を得たいところです。

東京にやってくる観光客は、だいたい、東京タワーか、サンシャイン60か、あるいは、この東京スカイツリーか、何れかにのぼることでしょう。

新しい土地にやってきた人の習性としては、どうしてもその土地を高いところから眺めてみたい、と思うことでしょう。



東京スカイツリー (右)

■鉄形蕙斎筆『江戸一目図屏風』
東京スカイツリーの竣工とともに話題になった江戸時代に描かれた絵画があります。それがこの鉄形蕙斎筆『江戸一目図屏風』です。江戸の鳥瞰図です。鉄形蕙斎（二七六四〜一八二四）は津山藩（現・岡山県津山市）のお抱え絵師で、文化六年（一八〇九）、藩のために筆を



鉄形蕙斎筆『江戸一目図屏風』（津山郷土博物館所蔵）

とりました。原本は、現在、津山市の津山郷土博物館に所蔵されていますが、東京スカイツリーの天望デッキでも屏風の複製が展示されています。東京スカイツリーの眺めが『江戸一目図屏風』の眺めと同じだからです。

しかし、いくら同じだといっても、屏風の中の江戸と現代の東京とは比べものになりません。当然、屏風の中の江戸ではビルは一本もなく、むしろ森や林が多い印象です。武家地の庭園が多いからです。

江戸時代にはビルや飛行機がありません。蕙斎は自らの想像力だけでこの江戸の鳥瞰図を描

いたのです。あの葛飾北斎もスPID・カメラなしで波が止まった姿を描いています。絵師の技備はたいしたものですね。

■『江戸一目図屏風』の構図の意味
ここでは、『江戸一目図屏風』の構図の意味について考えてみましょう。どうして現代の東京スカイツリーの眺めと同じ構図をとっているのでしょうか。留意点として、ふたつあります。

ひとつは、江戸城と富士山を重ねて描く、ということ。当時、江戸城と富士山を重ねて描く構図は珍しいものではなく、有名なものでは、日本橋の駿河町通りからの眺めがあります。実際、駿河町通りや本町通りの道の角度は、正確に計測すると、ぴったり、富士山の山頂に向けてられていることがわかります。

江戸城と富士山を重ねて描きながら江戸の鳥瞰図を描こうとした場合は、必然的に、現在の墨田区あたり、現在の東京スカイツリーの場所からの眺めとなります。

もうひとつは、江戸の鳥瞰図を、西からの眺めではなく、東からの眺めで描く、ということがあり得るでしょう。



安藤広重『名所江戸百景 するがてふ』
富士山の下にすこみえる松原が江戸城
(国立国会図書館所蔵)

前に「新しい土地にやってきた人の習性としては、どうしてもその土地を高いところから眺めてみたい、と思うことでしょう」と書きました。江戸を全体的に眺めわたす場所として、どこが定番であったのか？ そのひとつは愛宕山（港区）です。万延元年（一八六〇）、はじめて江戸に出席してきた紀州藩士酒井伴四郎も、愛宕山にのぼって江戸の眺めを確かめています。フリーリップス・ベアトという写真家も、幕末、愛宕山からの眺めをパノラマ写真におさめました。

すると、『江戸一目図屏風』は、誰もがみた西からの眺めではなく、山などの存在しない東からの眺めにした方が、絵として面白いのです。それが東京スカイツリー方面からの眺めです。東京スカイツリーからの眺めは、「東から江戸を俯瞰したい」という江戸人の念願の成就であった、ともいえるのかもしれない。

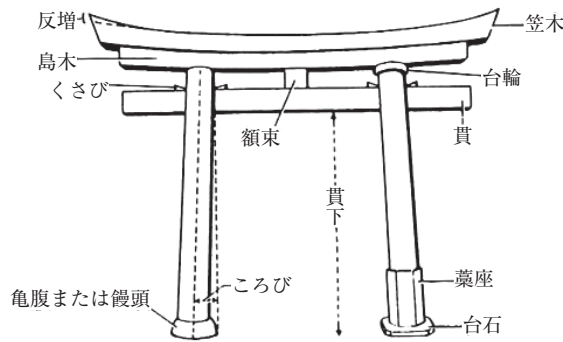
（墨田区文化財調査員
高尾 善希）

鳥居を見上げて

皆さんは、神社になぜ鳥居があるのか考えたことがありますか。また、一口に鳥居といっても、さまざまな形があることに気づきでしょうか。

鳥居は神社の入口や山、川、陵墓などの境界に建てられていますが、その由来や形状については、「墨田区文化財調査報告書Ⅳ」（昭和58年3月 墨田区教育委員会発行）には、次のように書かれています。

『鳥居とは、二本の柱と二本あるいは三本の水平材—上部のものを笠木、島木と呼び、下部のものを貫と呼ぶ—からなる神社の門を意味し、漢訳の場合「華表」という語をあてているが、両者は全く別のものでは



鳥居の各部分の名称

り、また、その源流を中国の牌楼や発音の上からインドのトラーナに求める説もあるが、むしろ神域を囲む玉垣の門の二本柱を横木で補強した我が国独自の自然発生的な神門とみるのが妥当のようである。

その形状としては、直線材をもって構成される神明鳥居と、笠木、島木などが曲線を示している明神鳥居、その他に大別される。(略)材質は、ほんらい木材であるべきではあるが、現状では石材(ほとんど花崗岩)からコンクリートにうつりつつあり、金属材料のものも少数ながら存在する。

鳥居は、構造としては耐震性に乏しく、また材質としても耐火性に欠けるといふ点から、特に本区についていえば、たとえば「江戸名所図会」の著者である斎藤月岑が安政大地震の被害をまとめた「安政乙卯・武江地動之記」などから、寺社の倒壊と共に鳥居の破損の甚だしかったことが分かる。」

さて、区内の鳥居の形ですが、半数以上は神明型が占め、次いで神明型、他の型は少数です。

また、区内にある鳥居のうち、江戸時代のものはずかにな鳥居が、三囲神社(向島2-

5-17)にある明神型石造鳥居です。この鳥居は、墨堤側にあり、土手下にあるため、対岸からは笠木や島木までしか見えなため「堤下の大鳥居」と呼ばれました。残念なことに、安政の大地震で倒壊してしまいました。だが、文久2年(1862年)に三井家によって再建されました。なお、「三圍社」と書かれた懸額は、綾小路有長の筆によるもので、明治3年(1870年)に三井両替店より奉納されたものです。

この三囲神社の大鳥居と牛嶋神社石造鳥居(向島1-4-5)、そして白髭神社石造鳥居(立花6-19-17)の3基が区登録文化財となっています。

三囲神社の大鳥居は銘が無く、三井文庫所蔵の文書から建立年が分かりましたが、鳥居の左右の柱には、建てた人の名前が刻まれていることが多い様です。柱に刻まれた年号からその歴史を振り返り、刻まれた願主の名前を読みながら、神社と願主のかかわりに推量を加えることも楽しみの一つです。

牛嶋神社の鳥居は、文久2年正月の銘があり、右柱には「奉猷 御手洗信七郎藤原正邦」と刻まれています。この人物は、子育地藏堂(東向島3-2)の傍らにも奉納されている万延



三囲神社の鳥居

元年(1860年)の銘がある庚申塔にもその名が刻まれており、本所・向島と縁が深かったのではないかと思われま

白髭神社の鳥居は、安永9年(1780年)6月に建立された明神型の鳥居で、右柱には葛西川村を中心とする氏子中が建てたことを表す「當村氏子中」という表記があります。元来は参道の中程にあり、現在は社殿の左手奥に移築されています。

鳥居を眺める時、簡素な中にバランスのとれたその姿の美しさにひかれます。神社の鳥居の形状の違いなどを楽しみながら、区内の神社を散策してみたいかがですか。

参考「社会教育だより」

(墨田区教育委員会発行)